

東大駒場友の会



会報第40号

秋の行事のご報告

味覚のアトリエ@駒場

受田宏之

一月二日(土)、第十一回味覚のアトリエ@駒場が開催されました。昨年度好評だった「会場での参加」と「自宅での配信視聴」のハイブリッド形式で、それぞれご希望のスタイルで計九〇名の会員・学生の皆さんにご参加いただきました。

会場となった「ルヴェンソヴエール」では、木畑洋当会会長の開会挨拶に続き、日本での「味覚の一週間」実行委員長の瀬古篤子氏から食育の重要性と広がりについて、説明いただきました。講演では、法政大学名誉教授(本学工学博士)の陣内秀信先生に、「イタ

東大駒場友の会 主催
第11回 味覚のアトリエ@駒場 リモート開催
味覚の一週間「東大生へ向けての食育」

「フランス・イタリアにおける食文化と地域性を知る」
5年連続開催(追加参加)を記念して特別価格!!

2023年10月22日(土)
17:00~19:00(受付開始16:30)※本学学生

参加費
本学学生 ¥ 1,000
会員(家族等) ¥ 4,500

会場
ルヴェンソヴエール(駒場キャンパス) 駒場キャンパス 駒場1-1-1

講師
陣内秀信先生(法政大学名誉教授、工学博士)

申込・問い合わせ
東大駒場友の会事務局
TEL: 03-5841-3111
E-mail: kumaba@kuon.t.u-tokyo.ac.jp



イタリアのテリトリー戦略とエノガストロミア

陣内秀信(法政大学特任教授)

豊かな食文化、さらに自治の精神に支えられたイタリア地方都市の魅力に熱く語られました。日本の地方開発も大胆に発想を転換する必要がある、というメッセージを受け取りました。

後半は、ルヴェンソヴエールの伊藤文彰シェフによる、一人暮らしの学生でも「少し頑張れば」作れる「メインディッシュになる一品の実演と解説がありました。今回の素材は、昨今専門店も増えてきた「シャルキュトリー(豚肉加工品)」です。伊藤シェフは味覚のアトリエ@駒場をずっと支えてこられました。今後はご出身の京都を拠点とされるそうです



が、駒場での食育には引き続き協力いただけるのとこのことで終了後、無添加のシャルキュトリーをメインとするお食事をワインと一緒に、配信参加の方には同

リアのテリトリー戦略とエノガストロミアについてお話しいただきました。陣内先生はふんだんに写真を用いて、歴史ある建造物と多様で日にお届けしたコース料理を「自宅で、それぞれお楽しみいただきました。ソーセージやテリーヌとアルザスの白ワインの組み合わせは、言葉にできない美味しさでした。

秋の講演会 「駒場と英語と世界」

昨年十月二日(土)の午後、第七回目を迎えた「秋の講演会」が開催されました。講師として、駒場の英語教育を長く牽引してこられた、二〇二二年度末に退官される本学教授のトム・ガリー先生にご登壇いただきました。

「駒場と英語と世界」と題し、オンラインで配信された講演会には、学生や会員の皆さま合わせて七〇名の参加がありました。ガリー先生には、日本の英語教育と駒場での英語教育、今後の英語教育の課題について、ご研究と翻訳、教育体験に基づいて、わかりやすく解説していただき、あつという間に一時間過ぎました。続くZoomのチャット機能を使った質疑応答では、「英語教育で英語が話せるようになるのか」、「翻訳する際、何を大切に訳しているのか」等の質問に、時間の許す範囲で丁寧にお答えくださいました。終了後



が話せるようになるのか」、「翻訳する際、何を大切に訳しているのか」等の質問に、時間の許す範囲で丁寧にお答えくださいました。終了後



のアンケートでは、「しばらく離れていた英語にまた触れたくなかった」、「ご著書に興味を持った」等の感想をいただきました。

講演を聴いて、キャンパスのグローバル化に取り組む中、ガリー先生の果たされた功績、存在の大きさを改めて感じました。先生は、友の会の会員でもあり、新入生を対象とする講演をお願いしたこともあります。教養学部の重要文書の翻訳のチェックも快く引き受けてくださり、英語と日本語の特性を知り尽くした見事な修正も忘れ難い思い出です。駒場の教育研究活動の真髄に触れることを目的にしたこの行事が、より多くの方のご期待とご要望に添えるよう、今後も企画内容を検討してまいります。

2022年度 東大駒場友の会 秋の講演会

講師：トム・ガリー 先生
東大大学院総合文化研究科 教養学部
グローバルコミュニケーション研究センター 教授

「駒場と英語と世界」

1957年、米国カリフォルニア州(サンフランシスコ)に生まれる。カリフォルニア大学バークレー校にて中文学専攻。その後、早稲田大学大学院総合文化研究科で言語学専攻(言語学専攻)の修士、1986年に東京大学大学院総合文化研究科で言語学専攻(言語学専攻)の博士を修得。2002年より東大駒場友の会(駒場友の会)の代表理事として活動。2008年4月、東大駒場の教養学部のために「アカデミック・コミュニケーション・センター」を創設。そのほか、言語学専攻(言語学専攻)で英語教育政策などに関する研究を推進。著書に『英語教育の国際的動向の分析と研究』(早稲田大学出版部)、『Handy Japanese』(早稲田大学出版部)、『英語教育政策の国際的動向』(早稲田大学出版部)、『英語教育政策の国際的動向』(早稲田大学出版部)、『英語教育政策の国際的動向』(早稲田大学出版部)などがある。

日時：2022年10月22日(土)
14:00~15:30 ※オンライン開催

対象者：会員・本学学生限定
詳細・お申込は当会WEBサイトにて(定員に達し次第締め)

主催：東大駒場友の会 協力：東大大学院総合文化研究科・教養学部

AIと語る関東大震災

能登路雅子

二月はじめのトルコ・イラン地震とほぼ同規模のM7.9という関東大震災から今年で百年になる。この惨禍の体験者はもう多くはないが、我が家においてはアメリカ留学中だった祖父の日記に一九三三年九月二日の記録がある。日曜日で封筒を買いにドラッグストアに行ったら店主が東京の大地震について教えてくれ、新聞を見て驚愕し、家族の無事を天地神明に祈ったとあった。

祖父佐々木喬は当時、東京帝大農学部助教で、農学の世界的拠点のコーネル大学にいた。故郷鳥取の実家に帰っていた妻子は無事だった。二年後に帰国し、京都帝大を経て再び東京帝大に戻り、附属農場長を兼任した。駒場にあった農学部の震災被害は限られていたが、東京帝大と第一高等学校との敷地交換の構想が震災後の本郷キャンパス復興計画のなかで急展開し、一九三五年七月に農学部は駒場から本郷区弥生町に移転した。

この大学内の出来事は祖父一家にも大きく影響した。それまでは駒場の広い官舎に住んでいたが、勤務先が本郷になれば子供五人を含む総勢十一名の住居を確保しなければならぬ。ちょうど同潤会が江古田に分譲住宅を計画中で、運よく三〇戸のひとつを手に入れることができた。

同潤会は震災罹災者救済を目的として一九二四年に設立された財団法人で、その後は青山や代官山などのモダンなアパートで知られるようになり、郊外の木造分譲住宅建設

も手がけた。玄関横の洋間、庭をのぞむ広縁など、昭和初期の中産階級向け住宅の典型といえ、創建当時の姿を残す佐々木邸は二〇一〇年に国登録有形文化財に認定された。大震災百周年の今年、特に犠牲者が多かった墨田区横網地区にある復興記念館では同潤会をテーマとした特別展が四月に予定されていて、唯一現存する同潤会の建物として佐々木邸の模型が展示される。

最近、設立当初の状況を知るために『同潤会十年史』を読み返していて、アレっと思ったことがあった。震災後の海外からの義捐金についての箇所で、「米国に於いては同国赤十字社によって救済金五百万弗の募金が企てられ総裁クーリッジ大統領自らラヂオ放送によって極東の友を救へと勸説に力めた結果は須臾にして義捐金壹千万弗を越した」という記述である。アメリカ研究に携わる者としても、クーリッジは第一次大戦後のT型フォードやラジオが普及した繁栄期に大企業を優遇した保守派という程度の印象しかない。その寡黙で地味な大統領が救援活動の陣頭指揮をとった日本の大恩人として特筆されているのには、正直驚いた。

さらに調べてみると、日本から緊急無線連絡を受けた大統領は九月一日夜には大正天皇に見舞いの電報を送り、翌日の日曜に赤十字幹部を招集して対日全面支援を指示した。(首都からそう遠くないニューヨーク州の大学町で祖父が大震災を知った日である。)三日には全米に向けたラジオ演説を行ない、陸海軍にも出動を命じて艦船と物資を送っている。

不思議なことに、このときのクーリッジの迅速果敢な行動も米国民による巨額の支援に

ついても、後世に語り継がれることはほとんどなかった。震災の翌年、米議会は日本人移民全面禁止を含む移民法を成立させて日米関係は急激に悪化し、日本の軍国主義が高まるにつれて国際的な人道支援の記憶は次第にかき消されていく。そしてアメリカにおいては、真珠湾攻撃を受けて、一八年前の震災援助の記憶が「恩を仇で返した日本」という新しいプロパガンダの形で突如蘇るのである。

ちなみに本稿準備中に話題沸騰の対話式A-1に関連の質問をしてみた。最初は英語で「関東大震災におけるクーリッジ大統領の役割は」と尋ねたところ、「通信技術が貧弱な当時、日米の距離は大きく、クーリッジの役割は限られていた。義捐金の多くは近隣のアジア諸国から届いた」と解答してきた。「その答えはおかしい。彼は世界最大規模の募金キャンペーンを牽引したはずだ」と指摘したら、「すみません、その通りでした。時の商務長官フーバーを東京に派遣して日本政府との調整に当たらせました」とますますデタラメを書いてきた。日本語でも同潤会と大震災の関係について尋ねたら、関係のない人物や団体や存在しない出典を並べ、設立年や命名の意味についても突拍子もない内容を長々と答えてきた。

のちの出来事によって歴史が故意に忘却されたり、遡及的に書き換えられる危険とともに、私たちはいま、新しいAI技術によってフェイクな歴史をまことしやかな言葉で撒き散らされる恐怖にもさらされている。

(東大駒場友の会理事・東京大学名誉教授・旧同潤会江古田分譲住宅佐々木邸保存会代表)

900番教室(講堂)におけるパイプオルガン演奏会の再開を巡って

ヘルマン・ゴチエフスキ

東大駒場友の会によって常に支えられている活動の一つとしてはオルガン委員会(＝駒場の有志の教員)主催のオルガン演奏会シリーズがあります。この場を借りて皆様のご支援に感謝するとともに、オルガン演奏会の意義と魅力について語りたいと思います。

というのも駒場にオルガンが入ったほぼ半世紀前から続いていた演奏会活動は、改修工事とコロナ禍があり、三年間中断されていました。オルガン委員会のホームページ(Hp://organclub.org.ac)の「過去の演奏会」を見ても分かるように、これは一九七七年の竣工記念演奏会以来初めての中断でした。昨年十二月の「第一四三回オルガン演奏会」をもって再スタートはしましたが、特に最近駒場友の会の会員になった皆様にはまだあまり意識されない活動ではないでしょうか。二度の中断がないように、オルガン委員会として務めたいと思いますが、駒場友の会の続けるの支援も期待しています。

このシリーズでは毎回国内外の著名な奏者を迎え、学外の方にも開かれて無料の演奏会を提供しています。教養教育にも重要と思われ、学部から基本的な予算を頂いていますが、そこから支払えないコスト(例えば演奏者の宿泊費)もあり、それを毎回演奏会後に集める寄付金から出しています。寄付金の管理や広報に関しては駒場友の会に多大な



協力をいただいています。また駒場のオルガン同好会(学生団体)は演奏会をボランティアの手伝いで支えています。

教養学部にもオルガンが設置される意義については拙著『教養学部のパイプオルガン』(『駒場の70年 1949-2020』東京大学出版会2021年242-246頁)で述べているので、ご覧になっていただければ幸いです。ここでは西洋クラシック音楽文化におけるオルガンの特別な位置について考えたいと思います。

十九世紀半ば以後のクラシック音楽では作曲家の存在感が大きく、その次には演奏者の存在感があります。演奏者は作曲家のアイデアを実現するのに楽器を使いますが、その楽器は画家の絵の具のように道具または素材に過ぎないと考えられる場合が多いと思います。もちろん「ピアノ」とか「バイオリン」という楽器はそれとして特徴があつて、作曲家はそれを知って作曲した上に、演奏者がそれを生かして演奏します。ただし「この部屋のピアノ」の特徴が「あの部屋のピアノ」と全く異なっていて、それによって演奏解釈も左右されることは、今日のクラシック音楽文化では理想とされません。会場に置かれているピアノ、または会場そのものも、皆よく似

ていて、ピアノリストがどこで演奏しても自分の考えの通りに演奏できるのは理想です。そうでなければ演奏者も困り、聴衆も不満を感じ、作曲家もまた可哀想でしょう。

重要なのは、このような環境が理想とされ、楽器と会場の統一が行われたのは一九世紀半ば以後の話で、それ以前は決してそんなことはなかったということです。それは「古楽器」をやっている奏者たちが毎日体験することです。しかしオルガンという楽器は今日まで他の楽器のような統一がなく、古来の多様性、つまり個々の楽器の個性を今なお残しています。

それには様々な理由がありますが、その中でもっとも重要なのは(前述の記事で詳細に説明しましたが)、オルガンが一つの楽器というより楽隊のようなものだということ。それぞれのオルガンが規模と編成が違うということ。それを「仕様」と言います。<http://organ.c.u-tokyo.ac.jp/disposition> (注) 特定の作品を特定なオルガンで演奏するためには、演奏者がまず楽器付けを行わなければならない。作品を「そのまま演奏する」ということはオルガンでは考えられないことで、演奏者はある意味でいつも編曲者の役割も果たさなければなりません。

従って特定の曲にはオルガンの適不適はあるでしょうが、また駒場にあるような小型のオルガンには可能性が比較的少ないので、不適に当たる曲も多いでしょうが、それはオルガンが「劣っている」という意味ではありません。あたかも弦楽器四重奏の演奏の特徴を、多数の弦楽器に管楽器も加えている交響楽団で真似できないのと同様に、NHKホー

ルにあるような巨大なオルガンでは実現できなくて、駒場の講堂でしか聴けない演奏効果が必要であるということです。オルガンの演奏には楽器の個性も現れ、作曲家と演奏者の対話のみで完結するということは決してありません。また、作品・楽器(十会場)・編曲という三角の中で演奏者はどのように自分の演奏解釈を展開するかは、奏者によっても大変異なるので、是非一度だけではなく、複数回駒場のオルガン演奏会に足を運ぶと良いと思います。

(本学教授オルガン委員会・委員長)

あのととき同じ教室にいたあなたへ

國頭真理子

こんにちは。二〇一九年度教養学部卒業生の國頭真理子と申します。教養学部にかかわる方々へ向けて何か、と寄稿のお誘いをいただき、題材をしばらく考えていたのですが、過去にひとつ、中途半端になってしまった挨拶があったことを思い出しました。駒場の卒業式で、私は共に学びゆるやかに繋がってくれた人々への謝辞を述べたのですが、これはあまりかけたパンドミックにより、話しかけるべき相手がない場所での発表になってしまいました。もう三年も前になる挨拶を引っ張りだしてくる気恥ずかしさもあるのですが、もしできることなら相手に届けばという願いも捨てられずにいますので以下長い引用をお許しください。

◆ ◆ ◆
このような場におりますと、とても場違い

なような、むずがゆいような気がいたします。というのも私にとって、駒場、特に後期課程の教養学部はたいそう居心地の悪い場所だったからです。なぜそれほどまで居心地が悪かったのか、恨み節を二つほどお話しさせていただきます。

まず一つ目。私は後期課程に進学したとき、友人と言える存在がほとんど近くにおりませんでした。サークルやクラスの仲間はほとんど本郷へ行ってしまい、(中略)誰が同期かもわからないまま孤独に二年のAセメスターを過ごしました。

そして二点目。それは各セメスターの初回の授業にしばしば設けられた、自己紹介の時間のせいでした。そこでは、学生がひとりひとり自分の所属と興味関心を簡単に話しておりました。ゴダール、ドガ、バルト、等々の名前が並ぶなか、「ミュージカルが好きです」という言葉を発したときの、まるで子どもがひとり舞い込んでしまったような感覚。自分の顔に張り付く気まずい照れ笑い。しどろもどろの言い訳してみた釈明。しかも、先程申しましたようにはじめ私は教養に友人がいなかったのですから、にやりとアイコンタクトを返してくれるひとにも到底おりませんでした。(中略)

しかし、いま振り返りますと、この駒場の居心地の悪さこそが、私を育ててくれたように思います。私は、なんとかしてこの気まずさから解放されようと、家ではミュージカルに関する先行文献を読み漁り、授業のディスカッションでは内容をなんとかミュージカルに結びつけて、ときにはこじつけて自説を展開するようになりました。自分の口から出る

「ミュージカル」という言葉に、まるでこびりついているようにすら感じられた決まりの悪さと、それでもなお、子どものときから自分に強く訴えかけてきたこのジャンルについて、なにか、それも学んできたことと結びついたかたちで語れるようにならねばならないという執着心のようなものが、私の原動力となりました。

そして、(中略)初めはひとりぼっちだった私の支えとなってくれたのは複数の授業で顔をあわせた駒場で一緒に学ぶ人々でした。この人々をなんとお呼びしたらよいのでしょうか。下の名前も、所属も、学年すらろくに知らないけれど、発表で扱っていた内容や、レジュメのレイアウト、フランス語の発音の癖は思い出せる、そんな人々。相手の発表に刺激を受けたり、逆に自分が発表をした授業の後声をかけてもらったりあるいは発表後のディスカッションで厳しい批判を受けたり、といったかわりが大きな励みとなりました。この言葉が届きうるのかわかりませんが、ありがとうございます。(中略) (二)では、先程申し上げた、しばしば連絡先も知らない、また一緒に卒業するのかわからぬわからない方々、この居心地悪くも今となっては離れがたいような駒場の学びの空間を共に作りあげてくださいましたすべての方々へ、心から御礼申し上げます、私のご挨拶とさせていただきます。



◆ ◆ ◆
今となってみれば、自分にとって切実な問題系について四六時中資料を読み、芝居を観、議論し、考えを巡らせることができていた時間はなんと贅沢な時間であったか、という感

概のほうが大きく、改めて自分の挨拶を読み返すと、そんなに居心地が悪かったかしら、と首をかしげたくなくなってしまふような気持ちです。

あのとき一緒に駒場のキャンパスにいてくださったあなたはいまどのように過ごしていますか。こちらは会社員として働きながら学部での学びや視点をそれと時に相反する企業の論理のなかで達成しようとする困難さに直面したり、またそもそも自分の学びが全然足りていないという事実に出くわしたりしています。あなたはいかがですか。またどこか一緒に考え、議論できる機会がありますように。

(二〇一九年度教養学部卒業生)

東大駒場友の会第六回活動報告会のお知らせ
二〇二三年六月十日(土)
開催形式、時間等の詳細および懇親会開催については未定。後日、当会WEBサイトでご案内いたします。

◆ 東大駒場友の会オリジナル
学事カレンダー二〇二三年度版

駒場キャンパス生協購買部にて、三月下旬より販売いたします(一部税込八百円)。学生・教員・職員による応募写真(キャンパスの風景写真)を掲載しています、どうぞお手にとってご覧ください。また、当会にご寄付いただいた方にはカレンダーの一部プレゼントしております。



◆ 金曜講座二〇二三年度・
夏学期(Sセメスター)

東京大学教養学部主催
「高校生と大学生のための金曜特別講座」は、二〇二三年度Sセメスターも会員の皆様に受講いただけるようになりました。まもなく受付開始予定、お申込等は東大駒場友の会HPをご確認ください。(開講初日は四月十四日(金)の予定です。)



◆ 駒場博物館では三月二二日から「アインシュタインが来た」展 訪日一〇〇年記念」展を開催いたします。
(一)来場に関する最新情報を事前にご確認ください。)



WEBサイトリニューアルのお知らせ

二〇二三年六月を目途に、東大駒場友の会のWEBサイトがリニューアルされる予定です。サイトの切り替え等でご不便をおかけする可能性もございますが、何卒ご理解のほどよろしくお願い申し上げます。

東大駒場友の会会報【第40号】2023(令和5)年3月15日発行
東大駒場友の会 会長 木畑洋一

〒153-8902 目黒区駒場3-8-1 東京大学 駒場ファカルティハウス内
電話：03-3467-3536 FAX：03-3465-3334
テレワーク中のためメールでのご連絡をお願いします
メール tomonokai@post.c.u-tokyo.ac.jp
web サイト https://tomonokai.c.u-tokyo.ac.jp/

デザイン・印刷 株式会社双文社印刷
https://www.sobun-printing.co.jp

会報のバックナンバーをインターネット上でご覧いただけます。
東大駒場友の会ホームページのトップ画面に「会報バックナンバー」というボタンがありますので、そこからお入りください。



穏やかな日差しの中でゆったりとくつろぐことのできる

フランス料理

ルヴェ ソンヴェール 駒場

東大駒場友の会の皆様がお食事の際に注文なさったコーヒーは、お支払いの際に会員証・会友証をご提示下さいますと無料になります。

[営業時間] 11:00~ 14:30、17:00~ 21:00

Tel : 03-5790-5931 / Fax : 03-5790-1902

◎駒場ファカルティハウス内